暮らす旅　京都

海の京都、伊根の舟屋

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

「寅次郎あじさいの恋」は「男はつらいよ」の中でも、ただフラれるだけじゃない寅さんが珍しく、ファンには評判が高い作品だ。とくにマドンナ役のいしだあゆみが暮らす海辺の家が印象に残る。

映画のロケ地となったのが京都北部の伊根町だ。手前の天橋立は日本三景として根強い人気だが、そのさらに奥にある伊根は観光客にはあまり縁のない漁村だった。

流れが変わったのは二〇〇五年。漁村では全国で初めて、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。自然の地形が作り出した波穏やかな湾内に面し、海辺には二〇〇軒以上の漁師の家が並んでいる。舟屋と言われる独特の作りは、一階は舟をそのまま引き込めるように海側があけられ、車庫ならぬ、舟を納める納屋として使われていた。

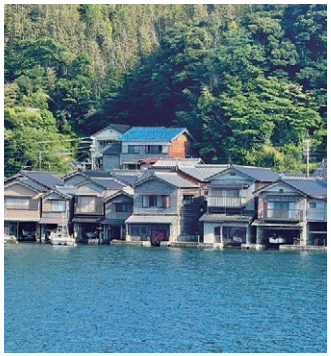
江戸時代には、伊根湾に迷い込むこんだ鯨を獲ることもあったそうだが、今はブリやタイ、岩ガキなどの養殖業が盛んだ。近年はその舟屋を、宿屋に改造し、獲れたての海の幸を供する宿が増えている。中には一日一客の高級宿もあるようだ。

コロナ禍前、オーバーツーリズムが叫ばれた京都だが。市内の有名観光地に殺到する旅行者を分散させようと始まったのが、京都府の観光政策。海、森、お茶、竹の四つのキーワードを使って、京都市以外の市町村を売り込む作戦だ。

梅雨の晴れ間に訪れた伊根では、レンタカーや小さめの観光バスでやってくる海外旅行客を多く見かけた。伊根湾を二十五分で巡る遊覧船は大人気。家族客がカモメにかっぱえびせんを食べさせようとデッキは大賑わいだ。電車で行ける天橋立と違って、交通のハードルは高いはずだが、京都府観光連盟の「海の京都」作戦は大成功のようだ。

実は伊根に向かう前に、「森の京都」の中軸である南丹市にある「美山かやぶきの里」に立ち寄ったが、その話は後日改めて。楽しすぎて？伊根に着くのが遅れて「天橋立の股のぞき」は時間切れ。代わりに北側の出口まで行ってみた。

湾内を巡る遊覧船かもめ号は日中、30分間隔で運航している。カモメの餌やりが人気。



右と上／波が穏やかな伊根湾は、ずらりと並んだ舟屋が独特の景観を作り出す。

左に伸びる木々が日本三景の天橋立。手前は内海の阿蘇海。北からの眺めは初めて。

3.6kmの砂州が南北に伸びる天橋立の北側入口。車両は禁止のはず。